



Mi'Te

◆詩と批評◆第162号◆ 2023年◆春◆季刊

◆ ◆

吉田恭子 Yoshida Kyoko

ケンダル・ハイツマン Kendall Heitzman

阿部日奈子 Abe Hinako

イナン・オネル Inan Oener

ジェフリー・アングルス Jeffrey Angles

笠間直穂子 Kasama Naoko

樋口良澄 Higuchi Yoshizumi

新井高子 Arai Takako

◆ ◆

・本・

〈英書〉評論 Kendall Heitzman『Enduring Postwar: Yasuoka Shotaro and Literary Memory in Japan』
Vanderbilt University Press (\$24.95)

小説 Kyoko Yoshida『Disorientalism』Vagabond Press (\$25)

翻訳 Hiromi Ito, tr. Jeffrey Angles『The Thorn Puller』Stone Bridge Press (\$14.75) 新刊!

〈評論〉阿部日奈子『野の書物』インスクリプト (3630円) 新刊!

樋口良澄『唐十郎論——逆襲する言葉と身体』未知谷 (2200円)

新井高子『唐十郎のせりふ——二〇〇〇年代戯曲をひらく』幻戲書房 (3080円)

〈自伝〉ジャン・フランソワ・ビレテール著、笠間直穂子訳『北京での出会い もうひとりの
オーレリア』みすず書房 (3960円) 新刊!

〈詩集〉ジェフリー・アングルス『わたしの日付変更線』思潮社 (2420円)

新井高子『ベットと織機』未知谷 (2200円)

〈訳詩集〉イナン・オネル訳『「ナーズム・オラトリオ」テキスト全訳』非売品

・お知らせ 1・

新井高子が第24回ベルリン国際詩祭(6/9~16)に招待されました。https://poesiefestival.org/en/

・2・

新井の詩「谷蟆」「アメノウズメ」が、新実徳英の作曲で、箏と歌の協奏曲になりました。

“深海さとみ箏曲リサイタル”(5/3、14:00～、紀尾井ホール) https://concert.jtcf.jp/9316

・3・

『週刊読書人』3月3日号に、樋口良澄が山田詠美著『私のことだま漂流記』の書評を執筆。

・4・

オランダの詩の雑誌『AWATER』2023年冬号に、新井が紹介されました。

3篇の詩の翻訳・解説・註：イフォ・スマツ（ライデン大学教授）

・5・

埼玉大学大学院特別授業「詩集『わたしの日付変更線』を読む」

(ゲスト：ジェフリー・アングルス、発表：曹橋云)を新井が運営しました(1/26)。

・6・

アドリアナ・X・ジェイコブス(オックスフォード大准教授)による「詩人のための翻訳ワークショップ」(3/4、立命館大学・東京キャンパス)に、新井が参加しました。

・7・

『mite』新号は、ウェブサイトの「お知らせ」欄からpdfでも読みます(半年限定)。

<http://www.mi-te-press.net/>

【後記】阿部日奈子さんに笠間新著の書評をお願いしました。小特集を組み、吉田恭子さん、ケンダル・ハイツマンさんに寄稿をお願いしました。

編集：新井高子／発行所：mite・プレス／発行日：2023年3月31日(金)

寄付を隨時受け付けております。郵便局口座：10090-74894051(名称)ミテノカイ

E-mail: mite@ace.ocn.ne.jp

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

“Stasis” “動かない”

Kendall Heitzman ケンダル・ハイツマン

Japanese Translation by Takako Arai 日本語訳・新井高子

In the early days of the plague, I lived among ghosts.

猛烈な伝染病のはじまりの頃、わたしは幽霊たちの中に住んでいた。

Time continued on for me, but for their lot, it somehow stopped.

時間は進んでいたけど、彼らにはそうでなく、何となく止まっていた。

At government offices and banks, they shimmered at their posts, their faces covered by masks, their bodies a blur behind the plastic sheets strung between us.

役場や銀行で、幽霊たちはそれぞれの窓口でちろちろ光っていた。顔はマスクに覆われ、からだはアクリル板の向こうにぼんやり、霞んで。

They spoke in low, sad murmurs, and I tried to guess from the movements of their hands or a slight shift in their posture what paperwork they might require of us the living.

こそこそ、ひそひそ、幽霊たちは話すので、手ぶりやちょっとした身動きで、生き者たちにどんな書類を要求しているのか、わたしは推し量ろうとした。

In stores and cafes, the spirits hovered behind the counter, witnessing, just out of reach.

店やカフェでは、靈たちはカウンターの後ろをうろうろし、近付くことなく、こちらを窺った。

They gestured toward the oversized machines that did their work, poorly, for them.

そして、代わりに仕事をする、大きすぎる機械を指差したが、人間のようにできるわけじゃない。

We are here, but

ここにいるけど、

we are not here,

いないんだよ、

their hands said.

彼らの手は言っていた。

You have to do it by yourself now.

もう君たちがじぶんとするしかないんだよ。

On the train, when a new wave of poltergeists clattered in, I made a habit of doing something unhinged at just the right moment, so that none of them took the seat next to me.

電車で、波のように化物たちがガタガタ入ってくるとき、わたしには妙なことをする癖があって、それをするときだれも隣りに座らなかった。

But one day, I saw the fear in their eyes.

だが、ある日、その目に恐怖が走っているのに気付いた。

When I ventured out to drag my chains around the neighborhood, I realized that I was just as dead to them as they were to me.

じぶんは彼らと同じように死んでる人みたいなんだ、と気が付いた。近所に出かけようすると、足に死人の鎖が付いていて。

That we were all ghosts to one another.

お互ににとって、つまり、わたしたちは、みんなお化けだ。

I was a kindly spirit.

わたしは親切なお化けだ。

I cut a wider swath than ever around the people I passed, now that I was trying to save them from me.

かつては通りすがりの人々をじぶんのためによけていたが、今では、彼らのためにさらに距離をとるようにしている。

In one corner of a park, hidden by trees so that only I could see it, was a green utility box, about chest high for me, with a little girl plastered to its side.

公園の隅には、わたしの胸の高さくらいの緑色の電源倉庫が木陰にあって、側面には、しがみ付いている女の子。

In trying to climb it she had lost her footing and now found herself splayed across the front of the box, held in place by friction alone.

上にあがろうとしたが、足が滑って、倉庫の扉に大の字でへばり付いていた。

“I’m stuck,” the girl said, sensing my presence behind her. “I can’t go up or down.”

「もうダメ」と、女の子はわたしの影を背中に感じながら言った。「上にも下にも行けない」。

In the before-time, I would have swept in to quietly dislodge her and return her to the flow before anyone saw me.

前の時代なら、すぐにその子を抱え、だれも気付かないうちに、もとの流れに返してあげたに違いない。

But now, I lingered just out of reach, gesturing to where she needed to plant her foot.

でも今は、近付かないで、ただうろうろ。足を掛けたらいい箇所を指差すだけで。

In the distance, her teachers looked around, confused, counting the children even as they whirled.

向こうでは、幼稚園の先生があたりを見回し、遊んでいる子たちの数が合わなくて困っている。

“Someone needs to help me,” the girl said, turning her head, looking through me but speaking in my direction to see what I might do.

「だれか助けてー」と女の子は言った。わたしのほうに顔を向けながらも、その奥へ目をやって、何かしてくれないものか、と。

You have to do it by yourself now, my hands motioned.

もう君がじぶんとするしかないんだよ、わたしはその手ぶりをした。

I am not here,

ここにいない

but I am here.

けど、いるんだよ。

コリンとスティーヴンとGO TO ジャパン

吉田恭子

だからわかつた、キヨーコ、君の短編は読んだよ。君の友人だし作品も読んできたから正直に言うよ。言うべきことをただ言うよ、いいね？ またぬいぐるみの話書いてんのかキヨーコお前はよ？ 五十三にもなつてぬいぐるみの話はやめろ。で今回は生まれ育ちがリヴィアプールのスティーヴン。J・ファウラーっていう野林檎大の青いゾウの話ね。だからさ、その手の話も二、三度なら読者は面白がってくれるわけよ

反骨心ある日本の女性作家が語るレザボア・ハロー・キティみたいな、ああキートだね、カワイイねえ？ ほらあの、ダーウィン出身のトランス・セールスカンガルーがミルウォーキーで一軒一軒家を回つて小間物売つて回るつて話。そう。それから殺人パンダの民兵組織が西安で人民解放軍に中指突き立てるみたいな？ なに？ パンダはホンモノ？ ぬいぐるみじやない？ 「ホンモノ」ってどういう意味だよ？ マジホンモノのはずないだろ。そりや、僕だつてパンダが民兵組織に属してない、血塗られた復讐のために人里襲撃しないことぐらいもちろん知つてる。君の小説を読んだだけだろ、僕は君の小説世界の住人じやないんだから。わかつたごめん記憶がいい加減で、はいはい、殺人パンダは血肉ある生き物で、ぬいぐるみじやありませんでした。わかりました。だからつてこの新作についての僕の意見は変わらない。「コリンとスティーヴンとGO TO ジャパン」。ところが、GO TOだけ大文字なのはどういうわけ。

でもこれは、この作品はちがうの。信じてマーティン。だって作り話じやない。虚構じやない。ホントの——ちがう、確かにコリンとスティーヴンは日本に行つたことがない。まだ。でも今回ばかりはホントの話を書くことにした。どこから始めたものか。ノリッジでのこと。英國文学センターのドラゴンホールでのイベントで、スティーヴンと私が一緒に朗読した。でもそれでそれが、他にも七組ぐらいいて、充実したイベントだった。ティファニー・アトキンソンはさすがだつたし、ふくだべるの宇宙船が鯨銀河に旅立つたあとで、つたひとり残された人類みたいに朗読するコリンも涙を誘つた。とにかく、イベントのあと、五人で（最後の生き残りパブ）に行つて——そう、五人、ノリッジ無敵のケイト・グ

リフィンと一緒に。パブではなんかディスコ・ナイトみたいになつててでもそれは奥の部屋だったから自分らはパイント飲みながらおしゃべりできるよねつて。スティーヴンが立派なホストらしく最初の一杯を奢ると申し出してくれて、私たちをテーブルに残してバーのあたりの人の群れに紛れていた。ケイトが少ししてテーブルを立つたので、ドラゴンホールの立派なホストらしくスティーヴンに手を貸しに行つたのかなと思った。でもまもなくドリンクもスティーヴンも抜きで戻つてきて、でも私らそんなこと気にせずただしやべつてた。でもそれからバーテンダーの女の人が現れてお盆にはドリンク四杯と、それからこの青いゾウ（ゾウを取り出す）。

バーテンダーの女の人はどういうわけかどの飲み物が誰の注文かわかつてた——ケイトはロゼ、キヨーコは赤、ぺろにはIPA、コリンにはソーダ。それで最後に彼女は床のかばんから空の茶色いボトルを取り出すとゾウと一緒にテーブルにおいてつた。最初それがなんだかわからなかつた。バーはバーみたいに暗かつたし。それはふにやつとして小さかつた。テーブル拭くふきんとか、ガミーベアの小袋とかつて思つた。それつきり……スティーヴンは戻つてこなかつた。三十分ぐらいして心配になつてきて探したけどスティーヴンの姿形なし。だから私たちの当然の結論は、スティーヴンはコレ（ゾウを取り出す）になつた。なんといつても目つきが……スティーヴン・J・ファウラーとまったく同じ瞳孔の開いた微動だにしない目つき。だつてね、この旅の前にペロと私のあいだで彼の日つきの話をしたぐらい……アイツ詩人の目つきじやなくて、拳闘士とか、アルジェリアから戻ってきたばかりの外人部隊とかみたいな？ この日つき、見てよ（ゾウを取り出す）。

なぜスティーヴンが赤子の拳大のゾウになつたのか……そりゃ話し合つたよ。翌朝ノリッジからグラスゴーまで車で移動の予定で——でしょ！ マジ、狂つてるでしょ？ あの晩ノリッジに着いて、翌朝コリンは全員車に乗せてグラスゴーまで……つて私に訊かれても……結局八、九時間ぐらいい？ かわいそうにコリン、でもそれで、彼は立派に運転手を務めてくれて——ところどき、ロンドンからノリッジのみちのりもはじめから呪われて……ヒースローに、二時とかに着陸して、翌日ノリッジ行きの列車は「重大分断」とかで全部運休。グレーター・アングリア、マジなめてんのか

つて。でもそれで、コルチエスター行きの列車に乗つて、そこから代行バスでイップスウイツチまで行つて、ノリッジ行きの列車に乗れつて。結局ノリッジには五時過ぎに着いてケイトが駅に迎えに来てくれて、だからまあなんとかなつたけど。イアン・マキューアンが前の晩来てたとかで、偉大な小説家やつぱりもコルチエスターで電車を降ろされたとか——つて、そんな自然災害じやないんだから、グレーターアングリアの重大判断は誰にも等しく降りかかるみたいなか——それで、なんでステイーヴンがこのちつちつい赤ちゃんゾウに変身したのかというと、当初は全員でグラスゴーでパフォーマンスする計画で、でもステイーヴンはスコットランドがダメなんだよね。もちろんそういうふうには言わなかつたけど。スコットランドの方が自分のことダメなんだとか言つてた。なんでつて？ いや私はわかんないでしょ。スコットランドの水道水が合わないとか？ それがグラスゴーとリヴァプールのライバル関係、港町対決とか？ なんにせよ、当座の結論は、ステイーヴン・J・ファウラーはグラスゴーの〈アルケミー・エクスペリメント〉で登壇するぐらいなら陰嚢大のふにや青いゾウになつたほうがマシだと思つた、つてこと（ゾウを取り出す）。

ロンドンに戻つてペロと私はステイーヴンをサウスバンクのエレファント・アンド・キャッスルへ連れていつた——なかに魔法が起こらないかと期待して——でもそこには捨てられたゾウのぬいぐるみの山しかなかつた。もはや我々は結果を生きるしかないんだ、ステイーヴンがゾウになつた世界という結果を。その姿でコリンとともに日本にやつてくれるしかないんだ……というわけでこの作品「コリンとステイーヴンとGO TO ジャパン」を書いたのです。これでまたもや私がぬいぐるみの話をでつち上げたわけじゃないつてわかりましたね、見方が変わりましたね？ もつかい読んだげる。あれよか、マーティンが私に読んでくれる？ 四ヶ月後に起ころるできごとに忠実だつて聞いて確かめたいから（マーティンに原稿を渡す）。

「でもどこへ？ どこへ行つたらいいのですか？」コリンは尋ねました。

「GO TO、オンセン、ベップ、ハコネ、ユフイン、ゲロ、キノサキ、GO TO」

そこでコリンとステイーヴンが大阪から特急コウノトリで城崎に向かつたのは、コリンは賢かつたので、むかしむかしこウノトリの家族が城崎の温泉を見下ろす松の木の上に巣があつて、脚を引きずつている父さんコウノトリが温泉に落ちてしまつて、でもなんとまあ、また飛んだり跳ねたりできるようになつた、というお話を知つていたからなのです。

そこでコリンはステイーヴンを城崎の温泉風呂に連れていつて、よくよく温かいお湯に浸してあげました。ところがじくじく濡れて臭くなつてしまつただけで、ステイーヴンにはなにも起こりませんでした。だからこれからコリンは東京と京都でひとりつきりで詩を読まなければなりません。というわけでコリンとはステイーヴンを人間の姿に戻してくれる奇跡を求めて世界中を旅して回つているのです。

いい日旅立ち男たち。互いにエクセレントであれ。

おしまい！

コリンとステイーヴンとGO TO ジャパン

おしまい

「ぼつちやんおじょううちやん、このお話はね他のぬいぐるみのお話とはぜんぜん違うお話、コリン・ハードさんとステイーヴン・J・ファウラーさんという連合王国のふたりの賢い詩人がなんと日本まで旅をしたというお話です。コリン

とステイーヴンのお話はあとほかにも三百六十四ほどあります。そのお話は他の七百二十八人の詩人が語つてくれるでしょう。ペルー、バンガラデシュ、イラク、アルゼンチン、ジョージア、まだまだいろいろ。

それでね、ぼつちやんおじょううちやん、どうしてかはまた別のときにお話ししますが、ステイーヴンは小さい青いぬいぐるみのゾウになつてしまつたのです。朋友がポケットにポンと入るようになつて、コリンはステイーヴンをどこへ行くにも連れてまわりました。賢いコリンはステイーヴンがいつの日が元の姿に戻るとわかつていただけます。魔法が訪れる瞬間を正しくとらえることがだいじなのです。

「GO TO」政府のおえらいさんっぽい人が関西空港で話しかけてきました。「GO TO」

「でもどこへ？ どこへ行つたらいいのですか？」コリンは尋ねました。

「GO TO、オンセン、ベップ、ハコネ、ユフイン、ゲロ、キノサキ、GO TO」

とステイーヴン

春ノリの祭典 — Japan UK Poetry Exchange 私的報告

新井高子

「いい数年、イギリスの詩人と交換プログラムに関わっていい。来年一月七日に東京で朗読会を開催します」英語で小説を執筆する作家で友人の吉田恭子から、こんなメールをもらつたのは昨年の一月下旬のこと。彼女とさくだべろは、英國の詩人コリン・バーントとスティーヴン・J・ファウラーを日本に招き、『Japan UK Poetry Exchange』という催しを行う計画を立てたのだつた。一月九日には京都でも行われたが、今号掲載の吉田作品（オリジナルは英語で執筆）からわかる通り、彼らは昨秋、ロンドンでともに朗読イベントを行つた仲間と言つてよかつた。

日本で生開催の国際的な詩の催しに声がかかつたのは、何年ぶりだね。おれらは一つ返事で了解したが、だれかとペアを組んでコラボレーションし、パフォーマンスする企画で、いくつかの組が出演予定とのこと。即座に、東京滞在中のケンダル・ハイツマンの顔が浮かんだ。日本文学研究者、翻訳家として活躍する彼だが、じつは若いときに詩を書いていたのをわたしはしつかり記憶していた。その話をこちらが訳し、こちらのを彼が訳し、そんな相互翻訳を「コラボ」として発表すればいいんじゃないか。

早速、メールする。「いま「コロナにかかり、誓願も大変だし、頭もボーッとしています」と。だが、準備を怠ぐことはない。ともあれ、ペアは結成された。

ただ、師走の時間は、穴の大きい砂時計のようにじんしゃんしゃ落ちる。その半ば、わたしが心配になつてみると、書き下ろしの詩が折よく着信。「添付します。一つはコロナの時代について、もう一つは……」じつは、わたしのほうは、コロナ禪の詩のリレー企画「空氣の日記」に参加し、その関連ならべつも詩がある。では、コロナでコラボ、と手を叩いた我々の成果の片方が、巻頭のケンダル作品、拙訳の「Stasis／動かない」だった（ケンダル訳の拙詩のほうは、『Tokyo Poetry Journal』にジョーダン・スマス編集によって掲載される予定）。

相互翻訳は白熱した。気せわしさという雨の中、傘をさし合つて二回の検討会を設けた。いや、始めてみたら、わたしには聞きたい質問が山ほどあって、しかもその回答がすこぶる面白くて、「覧の通り、彼の詩は、ソーシャル・ディスタンスによりて「幽霊化」した人間たちを描いている。あえて、「ghosts」「spirits」「poltergeists」という単語が出てくるが、それらがそんな人間たちの比喩だとふうことはわたしにもわかる。そこで試しに「ねえ、それぞれはどう違うの？」と素朴な疑問を投げかけると、ケンダルの答えが素晴らしかつた。「うーん。せんせお化けだけれど、『ghosts』はまあまあで「spirits」はとても誰かで「poltergeists」はあんまりやねんだけなんだよ。そ、そうなの？ そんなステキなこと、これまで辞書も先生も教えてくれなかつたよ。だからウロコが剥がれる音を聞きつつ、頭を捻つたわたしは、その順に「幽霊」「靈」「化物」の訳語を並べたしだいである。

また例えば、「I ventured out to drag my chains around the neighborhood へと回へ。ルハート死ぬと鎖を正めやねのー」と

尋ねるが、彼は曰を丸くして驚いた。「新井さん、『ヘリスマヤ・キャロル』を知らないの？ スクルーブのところにやつてあるだ」

靈のマーリーには、鎖が巻き付けているじゃないか。アメリカ人の想像力では、当たり前に幽靈と鎖は結びつくな。むむ。わたしだって子どものとき、ソレ読みましたよ。ロンドン旅行でディケンズ記念館に行きました。でもね、日本語の文脈ではゼンゼン繋がらない。日本語にとつてお化けといえば、三角の白い布だよ。わたしは指で額にその形を描いた。そして頭を抱えて、応急処置として、「鎖」の前に「死人の」を加えるといふで落ち着いた。

こんな調子だったのである。稚拙な訳に違いないが、時間はたっぷりかけた。さひに一月七日は「ペフォーマンス」であるが、何とかしなければならなかつた。とりあえず、鳴り物を入れようとも、手もとにある打楽器を始まりと終わりに振ることに……。さらにケンダルは「Stasis」を読むときはお化けに変装するため、朗誦途中で白っぽいシーツをとり出し、被りたいという（それは、ある程度、普遍的な幽霊イメージのよう）。では、わたしの詩のときはどうするか。彼が翻訳に選んだのは、麻疹の斑点とコロナ・ウィルスの増殖を重ねた内容の詩だつた。「ねえ、真っ赤な口紅で顔じゅうに斑点を描いてから、じつしょに朗誦するのはどう？」ともお掛ければ、「いや、それは新井さんだけで。ぼくは皮膚が弱いから……」。その理由が真実か方便かは確かめていない（笑）。

初春の一月七日、会場の北千住BUoY にさ、わたしたちのほか、「Steven J. Fowler × ベヘダクル」「園本啓×RūKey Littleforest」「八潮れん×小島田和」「Silje × Corey Wakeling」「Colin Herd × 吉田恭子」「文田悠光×橋上」「奥間華乃×小野絵里華×葉山穂」「大崎清夏×小磯洋光」「Lola Nieto × 四元康祐」、合計一〇組が集合。わたしたちは準備の共同作業をこのように満喫していくが、それぞれの組が熱い相談事をしてはいたのではないか。趣向が凝らされた各ペアから、詩朗読とともに、映像あり音楽あり舞踊あり芝居立てあり。もちろんシーツも斑点もあり。さういふ、いつそうの驚きは、入場無料とはいえ、一五〇名近い来場者に恵まれたこと。しかも客層が若い（すなおに嬉しい）。

理田のつば、吉田作品「コランとスティーヴン」とやGO TO O ジャパンの、あのノリではないかしら。「覧の通り、彼らはお調子者だった、たぶん確信犯的に。吉田にもそれはのり移っていた。もちろんふくだにも。だから段取りがラフだった。フランツだつた。なんだか小気味よい自由だつた。会場選びも面白かつた。そこは元銭湯で、廃墟めいた場所で、当日、スティーヴンは「おんせん、おんせん」とはしゃいでいた。ケンダルとわたしも、知つてか知らずか、師走のうちからみるみるその調子になつていた。たぶん、ほかの組も、たぶん、お客様も、たぶん、そううなつていたんじゃないかな。

この感じがじつに「お祭り」だと思つた。わたしにとつて東京の詩のコロナ明け。春みこしをみんなで担いだみたいだつた。会のあとも大勢がいつまでも居残り、おしゃべりが楽しかつた。しかもあれ、このような企画には、冷静さも財源確保も重要で、吉田とさくだが、このノリの外堀でそれらもきつちりこなしていたことに頭を垂れたい。吉田は京都文学レジデンシー（<https://kyotonwriters.org>）で講師としている。

* へいだべろによると、総合センターは「現代詩半帖」二月号掲載。

腰機の娘

サン・ファン・ラ・ラグナ
湖辺りの聖ファン村

ジェフリー・アングルス

カルデラに籠つた湖の中
桟橋から細い道が伸びて
永遠に煙り続ける火山の
下の険しい街を登つていく
左に曲がって 右に曲がると
そこに空色の壁の庭がある

耳をすますと その中

芭蕉の破れた葉っぱが
ひそひそつぶやいている
この村しか喋らない訛りで
微風が微かな摩擦の音になつて
止まると 声門が静に閉鎖する

木の影に 織工の娘は絞り出す
ニンジンから 燃え上がる曙を
ベニノキから 広がる赤い大地
ローズマリーから 枯れかかった緑
アカミノキから 紫の夕焼け そして
コチニール貝殻虫から 新たな日の出

素早い指で紐を拾い上げ
鮮やかな風景を織り合わせる
娘の掌から生まれる人像は
直ちに立ち上がりて祈り始める
世界がこの国の草木と虫から
永遠に生まれ変わるように

土性根

新井高子

いまだも、つい、言つちまアでしょ。呼ばなかつたもの、台所とア、あたしのいふもの頃ア。
そつや、わざふ、話アなかつたのや。

いつまじだつて、喋りにくついたもの、女たちやア、勝手口へまわりやア。あすこの亭主がアレ
して、女房がソレして、隠居がコノヤツて、ピンツと小指をツツ立てて。笑いころげてたつえ、
カラカラと。井戸端まで、箸がころんだみたいに。男たちも、豆腐屋、魚屋、笊だの葺だのの担
お屋も、いつしょに語つてさあ。

そこア、

おおらか、とも違う。言い立てだつたよ、勝手にせんじゆらひます、と。そんな暴れ氣が、家の裏側
にアあつし。

なつかしなあ、脱ぎ散らかされた下駄とサンダル、水場に揺れてる塩っぽい手拭い、たくあんと梅干し
の混じつたにおい、十間のにおい、ぬぐぬぐと立ちのせる大鍋の湯気。

家の根つこだよ

座敷よりも、神棚よりも、ずつと古へい

トコトコトコトコ、小イちやい足が

白木のお皿

お供物

運び

お勝手から

おばばは出たことがなかつた

どつぱり肥えて、

かきの化身だつた

あしがね、足裏から、

土性根が生えていた

詩人オヌル・ジャイマズの一編の詩

訳 イナン・オ'ネル

六

今年の冬は同じ歌を何回も何回も繰り返し聴いた
わたしは大好きだ 好きなことは何でも

七

詩人オヌル・ジャイマズは一九七七年にイスタンブールで生まれた。一九九八年にマルマラ大学技術教育学部電子教育学科を卒業した。一九九九年に青年出版短編小説賞を受賞し、二〇〇〇年にオルホン・ムラット・アルブルス詩賞を受賞し、その後また多くの小説や詩の分野で多くの賞を受賞してきた。ナーデム・ヒクメットとその後の「第二の新」などの詩派の伝統を受け継ぐジャイマズの一編の詩を取り上げる。

赤いマフラーが落ちる 冬のハンガーから

人は独りでも生きていけるようだ あなたが教えてくれた

わたしは綺麗な言葉を持ってきた 新鮮な果実を

その星のボタンを解いたら満月だ

八

わたしは希望をもつて眺めるわたしのテーブルにいる人たちを

九

わたしはあなたのために小説の文章から生命を盗んでいる

あなたは希望をもつて眺めるわたしのテーブルにいる人たちを

冬のための夜の音楽

一

わたしたちから生まれる小さき者の寓話を作るときに

十字架となる 協会の屋根でカモメと風

二

次から次へ 中程度の砂糖のトルココーヒー、詩、紅茶、菩提樹

のお茶

あなたのためにわたしは立ち止った 母もいず 嘘もない

三

まったく値しないとわたしは言っていた 自分と約束を交わして

ていた

一度と詩を作らないと どの女のためにも

四

もつとも美しいのは汽船で販売されるミント飴

あなたの名を見つけた新聞記事のスクランプ

五

あまりにも珍しい高笑い あなたの小さな部屋から
いかなる苦痛も長居できない あの青い光の下で わたしは分

かる

翼の生えた馬の伝説

バラードからやつてかれて…

徐々に広がるあの永遠の宇宙をわたしは信じている
だからわたしたちは互いに遠ざかっていく わたしはそれを
そして毎晩一度あなたの顔にキスをする あなたを

宇宙を 物質に存在する無限の空間を

陶磁器の花瓶を 花から残る色褪せた水を

眠っている間に撫でたあなたの髪を 寝台列車の車両を

窓際を 夜の人気のない道を

置き去りにされた幽靈のガソリンスタンドを

水を わたしは信じていると言いたい 水のような尊さを

無人のバーの開いた便器のカバーを

子供じみた色を 例え紫を 友人を

短編から長編に移行しない頑固な作家たちを

縫い針を 王の金箔の署名を ガラスを割るレンガを

早い成長を そぞろちろんスペイン内戦を

つい昨日母親たちの夢を破りながら

片方から徐々に曲がる割れた唇を

先をキスされるときに少し濡れる乳首を

よく抑えると片手で開くプラジャヤーのホックを

住所を尋ねた汗の匂いのするバスの運転手を

ストーブのない冬の夜を 錢湯の隠された歴史を

死んだ坑夫を 手の神秘を 時間の英知を

なぜか徐々に数が少なくなる神のシミを

白雪姫の処女性を アリスの捕虜性を

忘れないで言いたい アーティナーを いくつかの夜

ト音を

髪のないブルーストを わたしは信じている 髮のあるトルス

内側に咲く花のイチジクを 葡萄酒を

海を わたしは信じていると言えば それは本當だ 煙を

無駄口をたたく者を 試行錯誤を バランスを 学習ノートを

わたしの内側の修道院へ続いてどどまることのない時間を

徐々に加速する進化を 無線を 有線自動車を

道路を 人を一つの街から別の街へ運ぶ

翼の美しさを 炎を 駐車場のランプを

山が平野に言つた冗談を 襟の花を 真実を

鳥の声を わたしは信じる 雪山からの涼しい中庭を

あなたを 恋愛の音節よ あなたの顔を通り過ぎる苦痛を

物の服装たる文字を タートルネックセーターを
膝上のスカートを 水面下の森林を

女性の太腿を 高齢の仕立屋を 娼婦を

何もかもを わたしは信じている 磁石を 夜の銀河を

安全ピンを 光も好きだがそれでも暗闇を

レストランを 数学の残虐さを 論理の殺人を

肺結核のデリカシーを うつ病を コーヒーメーカーを
わたしの発狂の可能性を 最初期の地図製作者を 古代を
仕方のなさを 無限の再生を 呪われた盲目のボルヘスを

映画館で愛し合うことを 郊外の街の汚いホテルを
ビデオテープを ポルノを インクの入ったペンを
男性性の振動を 女性性の発見を

藻が生える天使を クレヨン絵の具を 汽船の料金表を
時々スーパーで見かける様々な変なものを見

夜になると翼の生えた馬になつて あなたの背中で興奮するわ

たしの手を

ゼロを 退屈を 貧困の暴食を

古いトルコを 図書館の天国を 自転車を

過去の死を まだ経験していない時間を

トイを

髪のないブルーストを わたしは信じている 髮のあるトルス

慈悲を バイオリンを演奏できる者を ザクロの秘密を

そして ごめんなさい あなたを

そして しかし わたしは信じない どの神も!

ありふれた魔女

笠間 直穂子

最近は、魔女、という言葉をよく目にします。魔女といつても、ファンタジーの登場人物ではない。呼び出されるのは、女性一般の置かれた状況を照射する歴史上の存在、すなわち、近代初期のヨーロッパで、魔術を弄するとして理不尽に拘束され、殺された女性たちだ。

きつかけのひとつは、魔女狩りを軸に、資本主義システムと女性に対する支配構造とを重ね合わせたシリヴィア・フェデリーチの大著『キャリバンと魔女』(二〇〇四)だろう。フランスでは、女性蔑視に重心を置いたモナ・ショレのエッセイ「魔女」(二〇一八)が、当地におけるフェミニズムの隆盛を象徴するベストセラーとなつた。

知識と力を有し、男性に統御されず、ゆえに排斥される女性を魔女になぞらえるのは、いまにはじまつたことではない。一九七〇年代、フェミニストたちは魔女を自任することで、優しく美しく従順な、男性社会に都合のよい被支配者でいることに異議を唱えた。

前回、アンヌ・シルヴェストルが妊娠中絶を歌つた一九七四年発表の一曲を取りあげたが、その翌年、彼女は魔女の曲を発表していふ。Une sorcière comme les autres' 直訳すれば「その他大勢の魔女と同じようなひとりの魔女」。つまり、どうにでもいふ、ありふれた魔女、ということ。この時代のフェミニズム運動の旗印となつた、シルヴェストルの代表作だ。長いのだが、緊迫感がみなぎつていて、省略できない。解説なしで、とにかく、全訳してみよう。

お願ひです

綿毛のようでいてください

昔使つた枕の羽毛のようでいてください
できれば荷かつぎでいたくないのです

お願ひです、軽くなつてください
わたしはもう動けない

生きているあなたを抱ぎました

子どものあなたを抱ぎました
まあなんと重たかつたこと
あなたの愛情の重さ
なおもあなたを抱いでいました
あなたが死ぬそのときも
花を持っていきました

自分の心を切り分けてあげました

あなたが戦争^{バトル}をするとき、わたしは留守番で
ました

あなたの牢屋の柵をわたしの祈りで磨り減らしました
た

あなたが爆撃で死ぬとき、わたしは叫びながら探し
ました
そんなわたしは墓のよう、中にあるのはあらゆる不
幸

それはただのわたし
それは彼女かわたし

話す女か黙る女

泣く女か陽気な女

ジャンヌ・ダルクかマルゴ
波の女かせせらぎの女

わたしの心か彼女たちの心
実の姉妹か見知らぬ女

来るのが遅すぎた女

夢に見た娘か行きざりの娘
わたしの母かあなたの母

ありふれた魔女のひとり

あなたは

小川のようでなくではありません
池の澄んだ水のように

光りながら待つのです

お願ひです

わたしを見て、わたしは本物
わたしを捏造しないでいただけますか
もう充分そうしてきましたでしよう

奴隸と見なしてわたしを愛し
無知であることをわたしに求め

「」からが強ければ対抗し
こちらが弱ければ軽蔑し

縄子に身をつつんだ

売女と見なしてわたしを愛し

わたしを彫像に仕立て

わたしはいつも黙つていた

者いて醜くなれば捨て

役に立たなくなれば助けを拒んだ

美しくて従順でいればひざまづいて崇めた

そんなわたしはまるで教会、底にあるのはあらゆる

恥

それはただのわたし
それは彼女かわたし

愛する女か愛さない女

君臨する女かもがく女

ジョゼフィーヌかデュポン

蝶鉢の娘か木綿の娘

わたしの心か彼女たちの心

港で待つ女

廻靈塔の女

踊つたすえに死ぬ女

アスファルト娘か花娘

わたしの母かあなたの母

ありふれた魔女のひとり

お願ひです、わたしが夢みてきた

長いこと夢みてきたあなたでいてへださい

風の「」とく自由で強いあなた

わたしも自由なのです、『』みんなねこ

怖がらずにわたしの『』を齧つてへだれら

わたしのほうはあなたを知りつくしています

Une sorcière comme les autres

Anne Sylvestre

わたしは待つ女だつたけれど
前に立つて歩く」とめでおおむ

薪であり暖炉だつたけれど

母なる女神だつたけれど

埃でしかなかつた

あなたの足許の地面だつたのに

そのことを知らなかつた

けれどもある日、大地はひひあ

火山は耐えきれなくなる

地面は割れて未知の富が顔を出す

海は手つかずの荒々しさを広げる

そんなわたしはまるで波、あなたは溺れる」とはな

い

それはただのわたし

それは彼女かわたし

先祖か子ども

譲る女か抗う女

ガブリエルかエヴァ

恋する娘か闘う娘

わたしの心か彼女たちの心

春を謳歌する女

誰にも待たれない女

不細工か美女

霧の娘か天空の女

わたしの母かあなたの母

ありふれた魔女のひとり

お願ひです、軽くなつてへだれら
わたしはもう動けない

歌われるのは、絶望から希望へと一直線に向かう物語ではない。終盤で口にする「自由」や「富」も、自分のなかで行き戻りつ、迷いながら。それでも「もう動けない」以上、声に出ねずにいられない。そういう語り方だからこそ、聴く者は、これはわたしだと感じるのだろう。

わたしのほうはあなたを知りつくしています

Une sorcière comme les autres

Anne Sylvestre

わたしは待つ女だつたけれど

前に立つて歩く」とめでおおむ

薪であり暖炉だつたけれど

母なる女神だつたけれど

埃でしかなかつた

あなたの足許の地面だつたのに

そのことを知らなかつた

けれどもある日、大地はひひあ

シルヴィア・フェデリーチ『キャリバンと魔女 資本主義に抗する女性の身体』小田原琳・後藤あゆみ訳、以文社、二〇一七年。

モナ・シモン『魔女 女性たちの不屈の力』こころあけ
訳、国書刊行会、二〇一一年。

ジヤン・フランソワ・ビレテール『北京での出会い／もうひとりのオーレリア』笠間直穂子訳、みすず書房、一〇二二年

不在のさきに在るもの——書評

阿部日奈子

講談社文芸文庫に『妻を失う 離別作品集』というアンソロジー（富岡幸一郎選）がある。詩、小説、エセーと形式はさまざまだが、高村光太郎、有島武郎、葉山嘉樹、横光利一、原民喜、清岡卓行、三浦哲郎、藤枝靜男、江藤淳が、妻との死別（葉山は妻の失踪）を綴っている。なかでも自宅での看取りとその後の心境を記した藤枝靜男の「悲しいだけ」は、医師としての冷静な觀察が感傷を撥ねつけるような一文だ。臨終の場面。

妻の手を掌にくるんで握ると、もう冷えていた。曲げた片脚をずらして踏みのばすように動かすのでさすつてやると何の反応もなく動きが止まつた。それは運動ではなくて、縮めるための緊張をしていた神経が働きを停止して自然の状態に戻る動きであった。呼吸も脈搏もなく瞳孔は散大していた。ブツブツ、グスグスという、肺に残存した空気の圧し出される喘鳴が一、三回づき、妻は完全に生を終わつた。ああ、アア、と思った。顔を押しつけている長女に

「もういい、身体をよく拭いてお化粧をして奇麗な着物を着せてくれ」ときつく云い「可哀想だから」と云おうとしたが声がつまつて室外に出た。——すべきことは簡単だ、と思った。

藤枝の場合、三十九年間の結婚生活のうち、妻が健康であったのは最初の四年のみ。肺結核、乳癌、癌性腹膜炎と続く闘病に、妻の体はぼろぼろだ。そこまで重篤な長戻いではなくとも、アンソロジーの書き手の多くは、一定期間の看病のすえに妻を見送っている。死の当事者は妻だが、その間に夫もかつてないほど死へと接近し、最後の最後に死せる妻から突き放されるようにして生へと戻つてくるという道筋が、どうの文章からも読み取れる。

しかしジャン・フランソワ・ビレテールの場合、別れは突然だった。妻・文は二〇一二年十一月二日から三日にかけての深夜に脳出血で倒れ、搬送先の病院で意識が戻らぬまま九日に亡くなっている。結婚生活はふつりと立ちちられたのだ。忍び寄る死の影のもとで夫と妻が向かい合う濃密な闘病の時間は、そこにはなかった。そのことは本書『北京での出会い／もうひとりのオーレリア』の成立にどうかかわるのだろうか。

本書は妻の死後に書かれた二冊の書物『北京での出会い』『もうひとりのオーレリア』を纏めて一冊としているが、書かれた順番は逆で後者のほうが先だという。『もうひとりのオーレリア』は、捉えがたい幻の女を狂おしく追い求める男の彷徨を描いたネルヴアルの小説『オーレリア、あるいは夢と人生』からタイトルがとられている。ビレテールは、予兆もなしにこの世から消えてしまった文をオーレリアに重ね、文

の面影を求めずにはいられない自身の魂の迷いを書き止めようとした。読者が目にするのは、危うい内面を覗き込むようにして緩られた覚え書きである。文の死後三日目の二〇一二年十一月十二日から始まり一〇一七年四月十六日まで続く独白が、抜粋され日付を附して並べられている。

読みながら、先述の、与えられなかつた闘病期ということについて考えていた。『妻を失う』の夫たちは、死にゆく妻を前に、妻について、妻の死について、死そのものについて、思索をめぐらす。しかしいきなり妻を失つたビレテールの場合、まず向き合わなければならないのは死をめぐる思索ではなく、文の不在であり、その不在に打ちのめされる自分である。日によつて暗闇の底まで沈んだり、ほのかな光を感じたりする行きつ戻りつが語られ、迷いながら著者は五年をかけて不思議な調和を見出してゆく——彼女はそこに居て且つ居ない、居ることと居ないことは自分のうちで並び立つ——とでもいったようだ。つまり『もうひとりのオーレリア』は、昨日までの愛の対象を失つた者が、自己のうちにその人の存在と不在とを同時に抱きかかえるまでの軌跡を示す書き物なのである。

もちろんそれはそれで読むに価する何かなのだが、おそらくビレテール本人は『オーレリア』を書き上げたのち、ここにあるのは自分自身と自分が幻視する文であつて、文本人の影が薄い、と感じたのではないだろうか。できることなら実在した文、生きて笑つて愛して幸福を好んで人々に囲まれていた文を言葉によって蘇らせたいという願いに促され、改めて結婚までのいきさつを語る『北京での出会い』が執筆されたようだ。そして、ビレテールの中国古典思想学者としての仕事や、広い読者に向けて書かれたエセー、中国人の文を伴侣としたその半生を知らない日本の読者にとっては、この『北京での出会い』を先に読むことで初めて、『オーレリア』での述懐に理解が及ぶことがある。訳書が原本の刊行順を逆にして、『出会い』を先に置いたことの意義もそこにある。本稿では話の流れで後回しになつたが、ここから『出会い』へと遡ることにしよう。

『北京での出会い』は題名どおり、一九六三年にスイスから北京へ留学した二十四歳のビレテールが、医師として働く一歳年下の文に出会い、さまざまな困難をかいぐつて結婚に漕ぎつけたのち、文化大革命を逃れて欧洲へと脱出するまでの回想である。まず驚くのはビレテール青年が留学当初、中國の政情についてほとんど情報を持つていないこと。おそらく日本の一般市民のほうが、歴史的地理的な関係の深さから、一九六〇年代の中国共産党内の権力闘争についてはよく知っていたのではないかだろうか。ちなみに私の家では母が中国語学習のために北京放送を聴いていたので、隣国の混乱は話題に上ることもあり、しかも文化大革命を全否定して「こんなことやつていたら中国はまた百年世界から遅れてしまう」と憤る母と、紅衛兵の「造反有理」に共感する私とのあいだに緊張が嵩じていたものだから、よけい中国の政争は気にかかっていた。

しかしビレテールも、ザンクト・ガレン出身で北京旧市街に住む李夫人宅のパートナーで文と知り合い交際が始まる、歐米化を怖れて外国人をスペイと見なし、西欧人との接触を妨げる中国の監視体制に気づかざるをえない。何が規範に抵

触するのかわからないカフカ的不条理のなかで、文の姉の助けを借りて逢い引きの手だてを講じることになるのである。いつ、どこに行けば会えるのか……恋する者にとつて北京は見えない境界が張りめぐらされた迷宮であり、そこでは自分の行動にさえ非現実感がつきまとった。

知り合ったころの文の魅力は、本書のカヴァー写真に余すところなく焼き付けられている。初めて遠出をした日にビレールが撮ったもので、文の初々しい笑顔からも、すでに二人のあいだに引き合ひう力が働いていたことが見て取れ、さまざまな感慨を抱かせるポートレートだ。その日の遠出については本文中にも詳しく書かれているので引用したい。本書の読みどころのひとつが笠間直穂子のすぐれた翻訳なので、それを味わうべく少し長めになるが一段落全文を引くこととする。決定的な思い出を手繰り寄せるビレールのうちで情景がどんどん鮮やかさを増してゆく……その機微が伝わってくらる自然な訳文だ。

そのあと、桜の谷（桜桃溝）イントガウに二人で遠出した。わたしの発案ではない。わざわざ誘う勇気など出るわけはないなかたし、その場所を知りもしなかつたのだから。たしか、動物園の前で待ち合わせて、頤和園発のバスにそこのから乗つた。バスは香山まで行き、降りるとそこはひとけのない、のんびりした場所で、すれ違つたのは何人かの百姓だけだった。そこから臥佛寺へと向かつたが、着いた先には誰もおらず、さらにわたしたちは裏手へまわり、小川の流れる小さな谷に入つていった。雨が降り出たので、小さな四阿に腰かけた。四月はよくこんなふうに雨が降る。文は黄緑色のケープを着ていた。雨が止むのに時間がかかるとも、わたしたちはかまわなかつた。ここで思い出すのは、一人の男がどこからともなく現れ、一言も言わずわたしたちの正面に座つたことだ。先に出ていったのが男のほうだったかどうかは覚えていない。戻るべく頤和園へ向かう道を歩くと、道沿いに点在する広々とした果樹園は花ざかりで、この田園に人間がいることを示す唯一の印は、遠くの軍の駐屯地に流れれる音楽だけだった。一向に来ないバスを待つのに飽きて、バスがこちらに迫つたら乗ることにし、先へ歩き出した。バスは結局来ず、わたしたちは全行程を歩きとおして、文の用意してきた弁当を手に頤和園へ入つた。数々の庭も回廊も、ほぼ無人で、雨はあがり、暖かく、曇り空だつた。文の持つてきた弁当は、下味をつけた肉を挟んで胡麻を散らした焼餅シヤオビン、ゆで卵、生のキュウリだった。文は淡い褐色をした薄手のウールのジャケットの下に、胴回りに締めたベルトが粋な白地に黒い水玉のワンピースを着ていて、地味な装いではあるが、ほとんどの女性が一樣に身につけていた青い布地の人民服とは対照的だつた。彼女はまた三つ編みをひとつしか編んでいない点でも、ほかの女性たちと違つていた。わたしたちの意思は口にされなかつたし、まだ完全に形をなしてもおらず、自分たちのしていることを言葉に置き換えはしなかつた。彼女の靴はつま先が丸く、甲が開いたところにベルトを渡してボタンで留めてあるのが、昔のイギリスの絵本に描かれたお行儀のよい女の子たちを思わせた。わたした

ちはこの遠足の第二部を、お互いどのような人物なのかを訊ね合うことで過ごした。

深くV字に剃つた胸元に纖細なネットレスが見えるワンピース姿を「地味な装い」とするのは、いささか疑問だ。《贅沢は敵》という風潮の当時の中国では、これはとびきりエレガントな、そのぶん反体制的な服装だろう。そもそも李夫人の義理の娘となつてゐる文の姉の言動にも、共産中国への覺めた眼差しが感じられる。妹の恋を後押しするこの姉は、桜の谷への遠出のあと、公園の遊歩道にビレールを呼び出して、こう切り出すのだ。

誰もいない遊歩道を各自自転車を押しながら歩いて、たわいのない言葉をいくつか交わしたのち、姉の目から見て具合がよいと思える場所で立ち止まる。姉は、警察が文を探にきたこと、文に危険が迫つていてこと、そしてわたしと文の二人は、会うのを止めるか、もしくは結婚すると決めて、なにがあろうと目的を達成するために闘うかのどちらかを選ばなければいけないことを告げた。

姉はこのときすでに、闊達で茶目っ氣のある妹をスイス人留学生と結婚させて、国外へ逃す心づもりでいたのではない。この時点ではまだ語られてはいないのだが、のちに読者は文の兄の手紙をとおして、彼らの父が抗日戦争中には張良の片腕として働き、そのために新中国の成立後は国民党に近い人物として冷遇されていた事情を知ることになる。こうした一家の境遇や姉の采配など、二人の恋情以外にもいくつかの潜在要因が絡み合つて、ビレールと文の結婚は成立了のかもしれない。外国人との結婚がどれほどの危険と背中合わせであつたか、そのことはビレールの友人が巻き込まれた悲劇が証していよう。南京でフランス語を教えていた友人は、中国人女子学生との結婚を望みながら帰国を余儀なくされ、恋人の女性はのちに文化大革命に巻き込まれて自殺している。ビレールと文も、周到に歩を進めて当局に受理させた婚姻登録があつてこそ、文化大革命から身をかわし、一九六六年にシベリア鉄道で欧洲へと渡ることができたのである。

『北京での出会い』は、激動する二〇世紀後半の中国社会の片隅で冒険に乗り出し、愛を成就した若者たちの物語であり、これを読んでから「オーレリア」に入れば、一人にとつて互いがどのような存在であつたか、より深く想像することができる。しかしそうなると、別の望みが湧いてくる。イスラエルでの文の生き方を知りたい、つまり「北京での出会い」と『もうひとりのオーレリア』のあいだの文について、知りたくなるのだ。文はどのように西欧を受容し、中国人女性として、教師として、母親として、結婚生活を送つたのだろう。莊子の研究者にふさわしく（？）「過去というものは、大部分を切り落とす必要があり、そうしてこそ本質が露わになる」と語るビレールだが、切り落とされた大部分、日常の細々とした言動や哀歎や表情や趣味をこそ、文に関心を寄せた読者は知りたく思うのではないか。どううか。

初源への廻行

樋口良澄

滴が行われている右腕の方に向かって、肘をつきながら、何度も上体を浮かしました。右腕の静脈に刺さった針から逃れるならば左へと体を回せばいいのに、針に向かって体を起す貴方は、のしかかるうとするものに歯向かうかと見たのは僕だけではないでしょ。」（『現代詩手帖』一九八三年六月号）

今年は寺山修司没後四十年である。まもなく命日の五月四日がやつてくる。亡くなった一九八三年当時、私が編集していた「現代詩手帖」に、寺山は最後の連載「パフォーマンスの銀河系」を始めたばかりだつた。体調が悪く、すでに演劇の仕事から離れ、言葉の世界に戻ろうとしていた。私は彼に、これまでの劇的行為や演劇論の全体を総合化するような仕事を始めてほしい、と依頼した。始められた連載は、空間、身体、メディア、都市といった視点から演劇を論じる。寺山にしか書けない、「これまでの演劇論とは全く」となるもので、しかもそれが書生成過程から考察するものだつた。私は第一回の原稿を受け取つた時、当時、映画、テレビ、演劇、文学とあらゆるジャンルでスターだった寺山が、小さな詩の雑誌に、自分の生涯をかけた連載を本気で書いてくれたことに驚愕したが、彼が当時言葉に帰ろうとしていたこと、また思潮社で彼の戯曲全集『寺山修司の戯曲』の続編が刊行されるなど、様々な要素が重なつた結果、この連載が生まれたのだということが今ではわかる。

それゆえ、当時三田にあった、寺山の事務所だった人力飛行機舎には足繁く通つた。詩の雑誌を編集する者として、これから寺山の仕事を、言葉に関する未知の可能性を開くものと期待し、連載以外の毎号の特集など、様々に相談した。彼の出版関連の担当者の中には、現在作家として活躍する湯本果樹実がいて、彼女から『寺山修司の戯曲』の目次案を見せられた時、見事に整理された構成に、演劇世界の混沌と猥雑とは異なる思考がその底に流れているのを具体的に感じた。専用の原稿用紙に、特徴ある筆跡で丁寧に鉛筆書きされたその案は、寺山の思考そのものだつた。晩年の彼と密度の濃い時間を過ごすことができたのは幸運だつた。その時間は、まだ私の記憶の底で冷めないままで。

最後に入院していたのは阿佐ヶ谷北口の河北病院だつた。現在の建て替えられた建物ではなく、古い病棟は不吉な予感がした。現在のよくな開放された感じではなく、いかめしく、日常と切り離された姿が、近寄りがたい「病い」の象徴のように見えた。悪いと聞いて、病院に毎日のように行つた。当時は隣の高円寺に住んでいたこともあるが、寺山が亡くなつた。どちらも病室には入れないので、スタッフの誰かに会うことができた。

彼らから唐が毎日のように来ていると聞いた時、驚いたことを覚えている。当時、私の見ていた唐は、状況劇場の座長として、世界の中にいるような立ち居振る舞いで、誰かの見舞いに病院に通りようには見えなかつた。後年、公私共に寺山のパートナーであった田中未知から、寺山が亡くなつた知らせを聞いて病院に駆けつけると「私が来る前に唐さんが病室にいるのよ」と話していたのを思い出す。葬儀で読まれた唐の弔辭は、この見舞いの体験から始まる。「寺山さん、入院中の貴方は、四百十号室のベッドで体をひねつて右に起き上がるうとしました。既に意識もなく瞼はぶさがつていましたが、点

唐と寺山。六〇年代前衛演劇を代表する一人であるが、作風も方法も劇団運営も全く異なる。両者の劇団同士の乱闘事件がスキャンダラスに報じられ、一人は大猿の仲のように捉えられているが、しかし、私から見れば深く関わるものがあつた。詩の雑誌といふ離れた距離から一人と付き合つたため、それを幸いにも見ることができたのだろう。二人は二重螺旋のようにして進んできたと捉える」ともできるだろう。現在をも穿つ彼らの言葉や身体への問い合わせ、二つの焦点をもとにしばらく考えてみたい。何よりも彼らは既成の演劇、いやそれどころか政治や社会までに戦いを挑んだ。その戦いは現在の私たちにも深く関わっていると思うからだ。

しかし、同じように深いものを見ていた者もいた。そのもつとも大きい存在は舞踏家・土方巽だ。寺山と土方は共感しあい、共同で作品を制作するまでになつた。唐は、劇団員だつた磨赤児に紹介され出会い、肉体を語る言葉を学び、現実的には劇団の資金稼ぎのために土方の指示でキャバレーの金粉ショーに出演し、その資金はやがて紅蓮トを買つ原資となる。土方は状況劇場と天井桟敷の劇団員の乱闘騒ぎの後、一人のために和解の宴を催している。土方の肉体論は、両者に深く影響を与えた。土方について、さらに一人の美術を担当した横尾忠則や合田佐和子についても検討しなければならないだろう。

いや、先を急ぐまい。まず、一人の出会いを整理しよう。唐は一九四〇年、寺山は一九三五年生まれで五歳違いだ。この五年は、四五年とにかく何かしないではいられなかつた。できることは病院に行くべくに終わる戦争体験を考えると大きい。寺山は幼少期に戦争を体験して、父の戦病死、母の戦後の米兵との関わりというトラウマは、生涯付いて回つた。唐は疎開によつて直接戦争を体験していないが、疎開と戦後の焼け跡からの復興は、虚構と現実をめぐる彼の原点となつた。一方寺山にとって青森から東京への移動が近代以前の闇から現代への移動となつたのに対し、唐は同じことを東京・下町という、いわば定点の中で体験していることは大きな違いだろう。そして寺山は、久慈み代が『編集少年・寺山修司』（一〇一四、論創社）で丹念に発掘したように、青森時代は俳句や短歌を書きまくる「言葉の人」だつた。

一方唐は、父親が映画関係者でもあり、子供時代から子役で活躍する

者志望の青年と見ていた。

前号で唐が在学中に書いた小説とシナリオが発見され、その初期がようやく見えてきたことを書いた。」のことを含め、彼の大学時代の演劇活動を調査し、新たにわかつたことを「」に記す。

これまで唐は、状況劇場結成時の一九六四年に最初の戯曲『24時53分「塔の下」』行は竹早町の駄菓子屋の前で待っている』(以下『24時53分……』と略す)を書くまで、役者として活動し、プロの役者として活動することを考えたと語りもし、捉えられてもきた。しかし、新発見の作品や、当時彼が出演した演劇のチラシ等に書いた彼の言葉を読むと、文章を書いていく野心は十分にあつた。そうして志向の中で書かれたのが、新発見の一作であり、最初の作品と考えられてきた『24時53分……』だろう。状況劇場の前身である、シチュエーションの会で、サルトルの戯曲を上演した後、自分たちの創作戯曲を上演しようと、唐(当時は大鶴義英の本名で活動)と当時の座長・笹原茂峻(現・茂矢)、劇団員・村尾國士の三人が競作した。二人は唐の作品を認め、それが上演されることになった。唐が笹原に変わつて座長に就任してからも劇団員として唐を支え続けた。大学時代の演劇活動から作家としての唐は芽吹き、他者が認めるような作品を書くまでにその芽は育つっていたのだ(後述のようにその戯曲に寺山が推薦文を寄せている)。

さらに、既成の演劇の枠外への志向もあつた。実験劇場の劇団員で友人でもあつた甲賀元嘉の証言では、当時の大学演劇は、リアリズム演劇全盛で、あまりに日本の現実と異なる西洋的な演劇観に違和感を持つていたという。道端で突然、即興劇をやろうと誘われたこともあつた。自分たちの現実にあう演劇を探つていていたのだ。同時代の早稲田大学の劇研から展開する鈴木忠志、別役実らの動きにも並行する、現代演劇へのうねりの中に彼らはいた。

実験劇場は、六〇年安保闘争に劇団として参加し、運動とともに敗北する。新たに活動するにあたつて現実の人々の中に入つていくべきだと彼らは考え、その年とその翌年の八月、茨城の農村に入り、唐の一年先輩の永堀徹作『水ひき』を公演した。ムシロを敷いて簡単な舞台を作り、村の人と共同で芝居を作つた。永堀によれば唐は手作りの舞台を指し、「ういう芝居をやりたかったんですよ」と語つたという。私は唐のテント興行の原点は浅草の芸能とともにこの体験があつたと考えるようになつた。そこには、寺山の「見世物の復権」という言葉と直接つながるものがあつたはずだ。(以上の唐の明治大学時代の演劇活動は、樋口良澄監修「実験劇場」と唐十郎1958-1962展パンフレット、1991-1992年、明治大学唐十郎アーカイブに詳述した)

*

六年二月、唐は卒業し、青年芸術劇場の研究生となる。一人の出会いはこの年だ。会合で出会い、すぐに意気投合し、唐は寺山の家をたびたび訪ねるようになる。唐が「実験劇場」出身者たちと独自の劇団「シチュエーションの会」の結成するのはその翌年だ。唐十郎・二二歳、寺山修司・二六歳。寺山はすでに時の人だった。短歌で時代の旗手と注目され、ラジオ・ドラマや映画シナリオも書き、注目を浴び続ける存在だった。唐は後に「あの頃はぼくは一介の役者で、『血は立つたまま眠つている』の続編があつたら、あわよくば出さしてもらおう」という位の気持ちで会いに行つたようなどころがある(寺山

修司・唐十郎の対談「劇的空間を語る」、唐十郎『乞食稼業』冬樹社、

一九七九)と語つてゐる。唐が、安保闘争を背景にした寺山の『血は立つたまま眠つている』を見ていたかは確証はない。しかし、実験劇場の仲間は、見て刺激を受けたようだ。」の発言をそのまま受け取れば、唐は少なくとも寺山の活動を意識していた。こうした交流の延長で、寺山の書いたテレビ・ドラマ『一匹』に唐は出演する。『一匹』は、テレビの創成期の一九六三年に放映されたNHKのテレビ・ドラマで、和田勉演出。物語は、牛を飼う農家の子供が、ある日、彼が可愛がっていた牛「太郎」がいなくなっていることに気づく。驚いた彼は太郎を探し、農協の事務員に品川の屠場に連れられていったことを教えられる。屠場が何か知らないまま東京に電車で向かい、いろいろな大人と出会い、屠場にたどり着く旅が、この作品を深くする。いわば少年の「大人への旅」と言つていい。それは東北から東京への寺山の旅に重ねていたはずだ。

少年は、屠場がどういう場所かを知る。人間が生き物を殺して生きているという現実と、「一匹の牛」というかけがえのないものとの矛盾。少年が、屠場の冷蔵庫で、天井から吊り下げられた何頭もの、革を剥がれた牛の胴体の間を「太郎」を探し回る映像は、その矛盾をもつとも印象深く描いていた。唐の役は、この少年に出会った男の一人で、寺山と唐にとってこの体験は、唐の戯曲の公演への布石となる。

唐は、最初の戯曲『24時53分……』を寺山に送り、自宅を訪ねる。寺山はそれを高く評価し、他にもないかと唐のカバンを探つたと唐は回想している。寺山はそうした交流を交え、公演チラシに推薦文を寄せた。

「唐十郎」という名の奇怪な男がいる。ヌード・モデルを副業としているそうだが、金に困ると肉体労働もやるらしい。しかし、見たところはタフ・ガイではなくて、むしろダイ風の軟弱な美貌の持主である。この、唐十郎の処女作である『24時53分「塔の下行」』は竹早町の駄菓子屋の前で待つている』という戯曲は、一読してアダモフやサミニュエル・ベケットを思わせる前衛劇だが、きわめて日本の(しかも浅草の重喜劇的)で、その上、詩的である。私はこの上演を大変楽しみにしており、唐十郎らのグループが野外劇から市街での即興劇、オフステージ、ストリップなど、劇場を飛び出した前衛劇へ発展していくことを期待している(中略)。「勿論、唐十郎が単なるスキヤンであるが」彼らがサルトルの状況劇を捨てて、創作劇に立ち向かつたのは、ホップ・ステップ・ジャンプの「ホップ」として拍手を送りたい。

この作品は、人々が町の中心にある塔に都電でやつてきて、階段を登り、上から飛び降りて自殺するという不条理な世界を描いてゐるが、人物の会話は寺山の書くように下町的なところもある。構造としてはシンプルで、寺山はこの短い作品から、劇作家としての唐の可能性を見出したと思うばかりだが、彼の書く通り「野外劇から市街での即興劇、オフステージ」になつていつたのだから、慧眼だ。唐を「発見」したのは寺山だと言つてもいいのではないか。」のまま一人の協同関係は展開するかと思われたが、長くは続かなかつた。

(続く)

今野スミノさんの海

新井高子

貴重なことば

昨秋、山形国際ドキュメンタリー映画祭アジア千波万波部門入選による『東北おんばのうた——つなみの浜辺で』（監督・鈴木余位、企画制作・新井高子、八〇分）劇場上映を、鈴木さん、英語字幕監修のケンダル・ハイツマンさん、さらにその教え子で日本滞在中のアイオワ大学卒業生たちとともに、わたしも客席で見つめながら、鈴木さんによる美しい映像や見事な編集ぶり、ハイツマンさんとその学生による行き届いた英訳に感激しつつ、ふと思い出していたことがあった。完成された作品のなかでは一人一人の出演は十数分だが、じつは、それぞれに少なくとも小一時間はわたしはお話をうかがっていた。映画に収まらなかつた部分にも貴重なことばがあつた。撮影は二〇一八年のことでの五年のうちに特にご高齢

の二人は他界された。鈴木さんのカメラを前に、特別な集中力で臨み、淀みなく語つてくださつたその内容は、いわばこの世への遺言、一世一代のじぶん語りだつた。さらに、それぞれが、數度の津波、第二次世界大戦、戦後の経済成長、そしてその停滞と少子高齢化の時代を生き抜いている。東北の海辺に住む女たちが紡ぐ近現代社会史と言つてもいい。

いわゆる聞き書きとしてまとめる方法もあるが、そのとき、その場のやりとりがじつに楽しかつた。そこで、質問者のわたしの存在も残しつつ、おばあちゃんたちの声をできる限り生き生きと文字起こしできないか、と思い付いた。『東北おんば訳石川啄木のうた』（未來社、二〇一七年）を通じて氣仙弁に詳しく述べ、『唐十郎のせりふ』（幻戯書房、二〇二一年）では耳ことばの魅力について考察した。そういう蓄積を活かし、微細な言い回しに耳を尖らせつつ、さらにご本人やご親族、ご友人にあらためて相談をし、文献も参照して註を付ければ、インタビューやのときはまだべつの意味で「おんばとの対話」ができるうな気もする。自主制作であれ、いつか一冊にする夢を持ちつつ、『みて』誌面の都合上、全体の四分の一ほどしか載せられないが、今回は今野スミノさんとの対話をまとめてみた。註は、これから徐々に充実させたい。

今野スミノさん（一九一八（大正八年）—一〇二二（令和三年））

今野スミノさんとの出会いは二〇一五年一一月、石川啄木の短歌を土地ことばに訳すための連続企画の第五回目を、大船渡市赤崎町の後ノ入仮設住宅集会室で催したときのことだつた。そこに住んでいたスミノさんは、そのほか五人のおんばたちとともにわたしの企画に参加してくださつた。数ヵ所の

仮設住宅および総合福祉センターで行つた全九回の催しのなかで最長老で、当時すでに九七歳だつた。いつしょに会を運営した日本現代詩歌文学館の高橋敏恵さんとともにそのお歳を聞いて感動したが、スミノさんの脇に座つておられた金野綾子さんは、その小柄な背中をさすりながら「ばつちは、催しがあればなんでも休まず出るんだよ」「津波のときア、一人でトコトコ高台まで馳せつてきたんだよ」と……。傍らで頷きながら、スミノさんは頬を紅く染めていた。身の丈一四〇数センチの、丸顔のおばあちゃん。焦げ茶の厚手のスマックを着て、ツバなしのニットのヘアキャップがよく似合つておられた。

そのとき、口数は多くなかつた。同じ会場にいた金野孝子さんたちの達者な口ぶりを、スミノさんはむしろじつと聞いていた。だが、小さな瞳はよく動いた。その会では、ルビ付きの啄木短歌のプリントを配り、各人に朗読もしていただいていたが、順番がスミノさんに当たつたとき、ちょっと溜めのような間合いを入れてから、一気呵成に読み上げてくださつた。ほんの十人足らずの会場ではあつたけれども、喝采が上がつたことを覚えている。

後ノ入仮設での催しは一回だけだつたが、スミノさんのことは高橋さんとしばしば思い出していた。「催しに皆勤賀なのは、お気持ちが若い証拠ですね」と讀えつつ、「はつきり写つているとよかつたのに、ピンボケが多くて……」と、写真担当でもあつた高橋さんは残念がつていた。目標の一〇〇首の訳を成し遂げ、書籍『東北おんば訳 石川啄木のうた』を刊行したときにも、元気でおられるかどうか、わたしたちは話題にした。のちのちまで追いかけてくる奥深さをその人は湛えていたのだった。ゆえに映画を撮る段になつて、ぜひスミノさんを、とわたしが考えたのはごくしぜんななりゆきだつた。

収録の二〇一八年一一月には、復興住宅（市営住宅）に転居されていたが、じつはいつそうお元気に見えた。催しから三年の間にわたしとの縁もいくらか温まり、また、その場に次男の嫁に当たる、気心の通じた今野オワ子さんが付き添つてくださつたことも大きかつただろう。一時間以上に及ぶ対話は途切れることなく、小さなおばあちゃんのからだから、一世紀分の大きな人生が凝縮されて展開した。くるくると頭のなかを巡らしながら、わりあい早口で、けれどもしつかり度胸が座つたもの言いだつた。その日のやりとりじたいが、好みの眼差しから世間を見通してきた人ならではの、決して敵を作らない、和やかでつつましやかな知恵の結晶だつたと思う。物事は決して一面だけで捉えられないことが端々から伝わり、さらに、漁師などの職業化した様態とは違う立場から、浜辺に生きる民、すなわち広義の海人の、太古にさえ繋がるやもしぬれぬ奥ゆかい暮らしぶりも浮かび上がつてくる。

復興住宅でスミノさんは一人暮らしをしていた。東日本大震災とその津波によるご自宅の損壊は、それまで同居してい

た息子さんたちとの別居をも引き起こしたのだった。災禍がもたらしたぎりぎりの選択であつただろうが、オワ子さんはもちろん、近隣に住むみなさんも収録の折に訪ねて来て、つきあいをこなすスミノさんはむしろ活発なほど忙しそうだった。

その日は三浦不二子さんとの対話もあり、それが終わつたの

ちは、金野孝子さんの差し入れのお弁当をみんなでいただい

た。そして興に乗つた不二子さんが机を太鼓がわりに叩き、スミノさんが手拍子を打ち、孝子さん、中村祥子さんが大船渡

音頭を歌つてくださつたひとときは、映画の名場面であり、わ

たしにとつては夢のような輝きの時間だった。

そうして鈴木さんとわたしが、心持ちの冷めやらぬまま座敷のすみでごそごそ片付けをしていると、スミノさんはせつ

せと卓袱台の拭き掃除をはじめた。「あ、わたしたちがやります」と慌てながらも、物腰の素早さに驚いた。

その後、一〇一九年八月、同じ場所でのささやかな上映会で、スミノさんは制作途中のそれを見てくださつた。別れ際、虫の声がする夏の薄闇のなかで、車に乗つて去つていくわたしたちのために表に出て、深々とお辞儀をしてくださつた姿が忘れられない。翌年三月には完成作の上映会を大船渡市リアスホールで晴れやかに行う運びになつていたが、間近になつてからコロナのため流れた。それを伝える電話で、「いまア、しようがないがら」と励ましてくださつたが、それからほどなく老人福祉施設に転居された。

その入居後は、連絡の仲介を担つてくださつたオワ子さんと親しくなつた。スミノさんが読み書きが達者でなかつたこと、漢字が不得手だつたため、役所からの手紙などはオワ子さんが読み上げて内容を伝えていたことなどを知る。啄木訳の催しの折、やや表情が硬かつたのはそのせいもあつたかといま察するが、ゆえにこそ、勉強したい気持ちがあつて、地元の新聞「東海新報」をよく見ていたこと、記憶力は抜群で一〇〇歳当時でも、三〇件くらいの電話番号を暗記していたことも教わる。ある意味では、数度の津波を経てさえも、最も大事なもののは身一つにしまうことができていた人かもしれない。その電話で、一〇二一年七月、一〇二歳一〇ヶ月の大往生を知つた。

さらに先日、文字起こしのために続柄を確認すると、じつはオワ子さんはスミノさんの実子のお嫁さんではない、と……。対話のなかで四人の子育てが語られるが、じつは先に嫁ぎ、子ども三人をもうけていた姉の早逝のため、スミノさんは後妻に入ったのだった。当時はそんなことがよくあつたようだと、

オワ子さんは言う。その人生には、一時間余で到底汲めるはない複雑さがあることをあらためて痛感しつつ、柿の実がたわわに実るあの秋晴れの日、とともにかくにも、スミノさんがらゆつくりお話をうかがえたことを幸運に思う。

おんばに聞く

〈生い立ち〉

新井 スミノさんは、いまちょうど一〇〇歳ですよね。

今野 一〇〇歳過ぎたばかり(笑)。

新井 お誕生日は?

今野 九月七日。

新井 大正七(一九一八)年生まれでしたか。

新井 生まれたのは?

今野 越喜来(おきらい)。三陸町越喜来。

新井 どんなお宅で生まれたんですか。

今野 あのね、崎浜っていう漁業専門のところです。だから、私たちが育つたときは、スルメを釣つて、網で魚を獲つて、それで生活してたの。

新井 ご兄弟は何人ぐらいですか。

今野 兄弟八人だつたけど、弟が一人最後に生まれて、戦死したんですね。ほいで、女のあれたれは死んでしまつて、妹が一人、ばつち妹^二が越喜来にいる。一〇〇歳まで生きとる人はだれもいねえんだけど、何で私は三こんなに生きてるのかと思つて(笑)。

新井 スミノさんは長女だつたんですか。

今野 いえ、長女の姉がね、家をとつていたの。で、いまは崎浜にいないです。双子が死んだり、生まれてすぐ死んだりして、それで八人だけ残つたんだけどね。

新井 何番目に生まれたんですか。

新井 私が七番目かな。昔だから、(実際には)兄弟が一二人ぐらいいたらしいですよ。双子が死んだり、生まれてすぐ死んだりして、それで八人だけ残つたんだけどね。

新井 あら、私のおばあちゃんも八人兄弟なんですよ。子どもときは、どんな遊びをしたでしよう?

今野 子どものときはね、よくおはじきとか、お手玉(笑)。そんなのをしてね。そこでほら、学校に行くにもね、スルメがたくさん釣れてくると、「今日は休みなさい、学校を休みなさい」。「今日は、〇〇の口開けだから、休みなさい」。だから勉強なんぼもしないの。

ていることも興味深い。

三 「ぱり」は「ばかり」の意。以下、同じ。

四 「口開け」は解禁のこと。アワビやウニなどの漁ができるようになること。

新井 学校も漁師さんの暮らしに合わせて、子どもたちが手伝えるときは、スルメ漁の手伝いとかをさせていたんですね。

今野 だからね、昔、私たちの時代は、おうちがいい人たちが高等科つて入ったのね。私たちみたいな貧乏な生活してるのは六年生で終わり。それで奉公に出された。で、私も大船渡五の旅館に子守に行かされたの。そのとき一年間一五円ですよ。

新井 一年間一五円ですか。

今野 それで五円で着物させることにして、一〇円で大きな俵に米と麦と積んで、越喜来まで積んで、やつて……。(そうして)そこでしばらく働いたの。

〈若いときの津波の経験〉

今野 昭和八(一九三三)年の津波のときは、(その直前に)ちょうど越喜来に行つてて。車もない時代だから、いま考えたら、よく歩いたもんですね、峠越えて。

新井 町場から遠いですね。

今野 それで実家へ行つて泊まつて、帰つてきた晩に津波に遭つたの、昭和八年の。

新井 はい。

今野 そのとき、その家の旦那さんはちょっとといねがつたんだか、なんだか……。奥さんのほうは、私が娘さんと茶の間で寝ていたのに、それを置いて、自分ばかり逃げてしまつて……。「あ、津波だ」って、びっくりして。いま考へると、私より一つぐらい少ない娘さんをおぶつて、裸足で、須崎川つて川のところをこう上がつたんだね。

そいだつて、置いてきたのを思つたげで、お母さんが迎えに來たわけ。だども、消防に止められで、途中で待つてたつたの。

新井 娘さんをおんぶして、裸足で、大変でしたね。

今野 そうそう、裸足で逃げたんだね。いま考へて、背もちつちやいのに、おぶつてよく逃げたもんだな(笑)。いま思うんですけどね、夢中で。それが昭和八年でしょ? それからチリだ。

新井 チリ津波は昭和三三年?

今野 三五(一九六〇)年ハ。チリのときはね、ちょうど大船

渡のほうにいる友達が具合が悪くて、その子どもたちがいたら、「泊まつてけろ」つて。で、私が泊まつたの。その晩、

チリだ。

五 ここでの「大船渡」は大船渡市ではなく、大船渡町のこと。スミノさんにとってそれは、市街地でもある大船渡市中心部を指す。

六 一年分の衣裳代として、いわば五円は巻き上げられたのだろう。

七 昭和三陸地震のこと。昭和八(一九三三)年三月三日発生。「大船渡市 東日本大震災記録誌」によると、三陸町綾里で二八・

七メートルの津波を記録し、大船渡市の死者・行方不明者は四〇五人だった。

八 チリ津波は、昭和三五(一九六〇)年五月二三日発生。チリ近

ほら地震が揺れないでしよう、チリのときは。
新井 津波だけ来て、地震はなかつたんですよ。そのとき、スミノさんもう結婚していたんですね。

今野 そうそう。で、旦那は盛(さかり)九の生まれなんですけど、盛にうちを借りるところなくて、赤崎に来て。(そのうちが)海のそばだつたから、大潮だと、玄関まで波が入つてくるようなどころにいたの。

(泊まり先)「あれ、なんだか、津波が来るらしいよ」と言ふから、じゃあ、帰んねばわがんねえな一〇と思つて。(けれども)ちょうど波が来たからね、大船渡で高台に避難したの。あれ、みんな元気でいたかなと思つて心配して。見たら、電話局が二階まで水が來てたのね。あ、こんでは赤崎に行ぐ橋も流れたなあと思つて。戻つていつたら、ちょうど盛の本家の息子さんが来て、「なんでここにいたの?」つて言つたから、「ゆうべ泊まつたの」と言つたつけ。

ちょうどセメント一のところまで來たれば、もう先に来られねえの(行かれない)。家族が生きでたか、死んでたか、わからないかなと思つて、ちょうどその近所に親戚がいたから、そこに上がりつたのね。そつたら、「ああ、みんな生きでた、生きでた。いま、下ズボン履かせてやつたからよ」つて、おばさんが言つて。

新井 下ズボン履かせるつて……、何ですか。

今野 みんな裸で逃げたから。

新井 ああ、はい。

今野 子どもたちも服を着たんだか何だかでねえ……。それで、ともかく道路がない(不通になつてゐる)から、(避難所の)八坂神社へ行こうと思つたら、大船渡病院のお医者さんと看護婦さんが担架を持つてきました。その人たちを私が誘導しながら、避難所まで、神社まで連れていつて。で、家族に会つたのは午後の二時頃だつたねえ。

新井 では、赤崎のおうちは津波で……。

今野 流れてしまつて。

新井 でも、お子さん、家族は無事だつたんですね。

今野 子どもたちはね、背中に水が來たのでびっくりして起きたんだ、つて言うんだもの。海のそばだつたから。

新井 津波が來たのは夜だつたんですか。

海を震源とする地震による津波が日本列島にも襲来した。「大船渡市 東日本大震災記録誌」には、日本におけるその最大の被災地は大船渡で、死者・行方不明者は五三人だつたと記載されている。

九 盛町は、大船渡町の隣り町でやはり市街地。赤崎町はそこから盛川を経た漁業の町。

一〇 帰らなければならぬ、の意。

一一 太平洋セメント大船渡工場のこと。赤崎町の入り口に、近代産業として一九三六(昭和三一)年に誘致された。

一二 下着、ズボン下のことだと話しながらわかる。

今野 夜、夜。

新井 子どもたちが間に合つてよかつたですねえ。本当にねえ。

今野 借りてたうちが、ちょっと行けばすぐ海で、浅利とるにもいい。海苔が流れてくれば、拾つてきて食べる。そんなところにいたつた三から。ねえ、いろいろありましたねえ。

新井 本当にねえ。そのあとはどうされてたんですか。

今野 そのあとはね、仮設住宅が建つまで小学校の講堂にいました。それから仮設ができたら引っ越して、うち建てるまでそこにいましたね。

（暮らしむき）

新井 スミノさんの旦那さんは、漁師さんだつたんですか。

今野 あのね、桶屋なんです。

新井 木で桶を作つていた。

今野 桶屋でね、プラスチックが出たでしよう。桶屋をやっているときはどうやらよかつたの。だども、プラスチックが出たら、桶屋の仕事は全然ない一四。ほんでほら、生活が今度は困るでしよう? 「何か働いてください」って言えば、桶屋しかやる気しねえ旦那だったの(笑)。

新井 桶は上手につくる人だつたのに。

今野 仕方がないから、私がこんだは働きさ出たの。で、蕎麦屋さんに一五年働いた^(一五)。

新井 お蕎麦を作つたんですか。給仕をされてなんですか。

今野 蕎麦屋でね、ほらあの、料理つくるほうは料理つくるほう。釜前つてほら、お蕎麦の注文が来れば、煮て……。そこの私は釜前の当番だったの。あと、茶碗洗いは茶碗洗いでいたしね。

オワ お蕎麦の茹の方だ。

新井 蕎麦屋さんは盛にあつたんですか、大船渡ですか。

今野 大船渡。で、倒産したんですね、その蕎麦屋さんも…

…。だからそこで一五年働いたんだけど、保険一六かけてくれなかつたのよ。保険がなかつたのよ。ほいで、徳^(一七)のない者つてだめなんだな、と。主人も海軍で行って、頭、一二針縫つてるんですよ。

新井 はい。

今野 それで終戦と同時にね、医者の証明よこせとか、写真撮つてよこせとかつて、ハガキが何回も来るんだつけねえ。だ

(一三)「そななところにいたつた」の「たつた」は、現在から切り離された遠い過去の表現。盛岡や三陸沿岸に貴重に残る。

(一四)一九六〇年代以降、石油化学工業の発達とともに、プラスチック製品が大量生産され、生活道具や衣料に浸透していく。

(一五)今回掲載できなかつた部分でスミノさんが語つているが、三陸海岸でサンマ漁等が盛んだった高度成長期、この蕎麦屋は大船渡港に寄港する船の漁師たちで賑わっていた。

(一六)社会保険のこと。

(一七)狂言などを聞いていると、富裕な者を「有徳人(うとくじん)」

けん、面倒くさがつて、いま大丈夫だからつてやつたらしいの、そこに。それでみんながお金もらつてること聞いて、泡食つて。土浦の海軍病院がなくなつてしまつて、証明する人がいなかつた。それで一錢ももらえなかつた。

新井 一二針もケガしたのに、恩給がなかつた。

今野 徳がないつてねええ。いまそのお金でももらつていれば、何も苦労しなくともええ(笑)。少しばかりの年金で、みんな、あれされてこれされて、生活してる(笑)。

新井 お蕎麦屋さんに勤めた一五年間は、赤崎から通つていたということですね。

今野 そうそう、バスで通つたんですね。

新井 子どもさんは何人恵まれたんですか。

今野 子どもはね、何人だつけ。

オワ 男だけ四人。

新井 あら、桶屋さんのお父さんと仲良くて(笑)^(一八)。

今野 孫が七人。ひ孫が……。

オワ ひ孫が三人。

新井 こんなにちつちやなおばあちゃんから(笑)。子どものために、お父さんの分まで働いて。

今野 働いてね。お蕎麦屋さんだつたから、昔は炭で釜でご飯を炊くんだつたね。で、おこげが出るんですよ。そうすつとね、そのおこげが、毎日おこげをくれやつたもんだから、私の袋へナイロン^(一九)入れて、つつ込んでおくわけだ。

新井 そのおこげの部分をね。

今野 でもそのおこげがね、炭でたくごはんがおいしかつたの。それ、もらつてきて。うどんもらつてきたり、蕎麦もらつてきたりして、子どもたち育てた。(後略)

協力・今野オワ子

映画『東北おんばのうた』より

左・今野スミノ、右・新井



と名指す。スミノさんが使う「徳」の意と近い気がする。
(一八)紹介文で書いたように、スミノさんは姉の早逝のために後妻に入り、じつは実子は末の一人だけだった。わたしはそれを知らずに冷やかしたのだが、いつしょに笑つてくれたところに四人を育て上げた矜持と思う。さらに、やりとりの裏側の深さにしみじみする。

(一九)東北弁では助詞「に」「へ」を「さ」とも言う。「町へ行つた」は「町さ行つた」。「ナイロン」はビニール袋だろう。